

## 「平成30年度『学びのスタンダード』推進事業」の推進地域の取組

パイロット校名	本宮市立本宮第二中学校（パイロット校Ⅰ）、岩根小学校（パイロット校Ⅱ）
推進協力校名	本宮市立五百川小学校

### 本宮二中学区「学びのスタンダード」

本宮二中学区は、県内14地域で実施されている「学びのスタンダード」の事業推進地域として指定を受け、「授業スタンダード」の活用を含めた授業改善・教員の同僚性の向上・授業の基盤となる学習集団づくりに取り組んでいる。

#### 1 パイロット校の取組内容

##### (1) 「タテ持ち」・「教科担任制」の取組



中学校では昨年度から数学科の3人の教師が、それぞれに全学年を担当する取組を行っている。今年度はタテ持ちをより持続可能な取組にすべく、話し合いの内容を吟味した。中でも、定期テスト問題の検討では、問題の妥当性を通して、身に付けるべき資質・能力や正答を引き出すための継続的な指導のあり方などを議論した。また、小学校では昨年度、中学校の指導体制を見据えた取組として、第6学年では、国語科と算数科において教科担任制を実施してきた。今年度はさらに教科担任制の幅を広げ、高学年において実施し、TT体制も継続して整え、さらなる指導の充実に努めてきた。

	A先生	B先生	C先生
1年	1組	2組	3組
2年	1組	2組	3・4組
3年	1組	2組	3組

6年1組担任	1組、2組の国語・音楽・図画工作の授業を担当	6年2組担任	1組、2組算数・社会の授業を担当
5年1組担任	1組、2組の社会の授業を担当	5年2組担任	1組、2組の音楽の授業を担当
※ 国語、算数の授業においてTT体制を実施してきた。			

【左表：タテ持ち担当】

【右表：教科担任制 写真左：T1全体指導 右：T2板書】

##### (2) 「授業スタンダード」の活用

「授業スタンダードとのつながりはここ！！」として、指導案に授業スタンダードを活用した部分を書き加えることで、授業のねらい、発問、教師の支援の明確化をより意識できるようにした。また、自校のアレンジを加えた「授業スタンダードチェックシート」を活用し、視点をもって授業を参観することができるようにした。



#### 授業スタンダードとのつながりはここ！！

「学習する前は・・・だったけど、〇〇さんの考えを聞いて・・・とわかった。」  
 「△△さんの意見を聞いて、やっぱり・・・ができることがわかった。」のように、  
**終末に自他の考えをつないで、本時の学習を深めたい。**

※ 指導案の手立ての項目に、上記のように授業スタンダードの画像、印、説明を加えた。

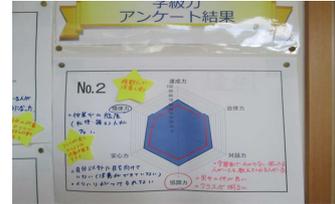
### (3) 授業の基盤づくり

授業の基盤づくりに向けた取組を、小・中学校それぞれの実態に応じて行っている。小学校では、学級活動を校内研修に位置付けて行い、中学校では、学級力向上プロジェクトという実践を行ってきた。学級活動、そして学級力向上プロジェクトの実践は、学びの集団づくりにおいてとても効果的であり、学びへ向かう姿勢が高まった。



#### 学級力向上プロジェクト

3. 方法
- 年3回の実施
- ① アンケートの実施
- ② 学級での話し合い
  - ☆学級でのよさと課題を可視化
    - ・グラフとよさ、課題解決法を廊下に掲示
    - ・レーダーチャートの指標
  - 達成力 自律力 対話力 協調力 安心力 規律力
- ③ 廊下への掲示
- ④ 全校集会における縦割り班での発表



【自分たちで考え話し合う学級活動】

【学級力向上プロジェクト 左:概要 右:レーダーチャートの掲示】

## 2 推進協力校の取組内容

### (1) 「授業スタンダード」「学びのスタンダード推進だより」の活用

各担任が5つの授業の視点を意識して研究授業を行い、授業改善に努めた。特に今年度「授業の終末」段階の充実に取り組んだことで、適用問題を実施するなど学習内容の定着が図られた。また、「学びのスタンダード推進だより」を参考に、「子どもの分かった感」や「時間管理」などのキーワードを大切に授業を進めることができた。

### (2) 講演会の実施

福井大学准教授の風間寛司先生を招聘し、推進地域三校の全ての職員が講演会に参加した。『授業スタンダード』『家庭学習スタンダード』と福島・福井の実践を視点に」というテーマのもと、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて講話をいただき、推進地域が一体となって考えることができた。



## 3 成果と次年度へ向けて

- 教科担任制の取組により、各教科の教材研究にかかる時間が増え、より充実した専門性の高い指導が行えた。また、タテ持ちの取組では、指導内容の系統性をより深く理解した指導ができるとともに、生徒側にしても上級生の学習の様子を意識しながら学習できるため新たな学びに向けやすくなった。
- 「授業スタンダード」の活用は、授業者のねらいがより明確になり、授業の質的向上に大きくつながった。また、教科担任制の中学校においても、授業改善の視点も明確になったことで、他教科の先生方が参加して指導案検討を行うなど、学年・教科という従来の枠組みを超えた学び合いが行われた。
- 小・中学校共に、子どもを中心に考えた授業づくりへの授業改善と授業の基盤づくりを進める取組の効果により、互いに助け合う望ましい人間関係が醸成されてきた。
- 「分かった、できた」をさらに実感できる授業の終末を工夫していく必要がある。